

## 教師教育の充実に向けて

永井聖二（全学教職課程委員長）

戦前の師範学校を中心とする教員養成にかえて戦後の教師教育が構想されたとき、その原理となったのは、大学における教師教育といわゆる開放制の原則であった。この構想は、広い教養と教師としての狭義の専門性を兼ね備えた教育者の育成を目指すものであったが、同時に大学におけるアカデミズムと教育実践のかかわりによる研究の進展を要請するものであった。

その後の展開は、必ずしも当初の構想の期待に沿うものではなく、頑なな現場至上主義と空疎な高踏的議論のすれ違いは、今日でも必ずしも解消されたとは言えない。しかしながら今日においても必要なのは、単なる実践知の再生産だけに偏る教員養成でもなければ、実践とのかかわりの希薄な研究の進展でもない。というより、今日こそ、家族や地域社会という機能的教育主体の変動や情報化の進展のなかで、近代社会の装置として誕生した学校が21世紀においていかに存在することができるのか、日本型の教師役割や学校の在り方の優れた点をどう継承することが可能なのかについて、教育実践に資する志向を強くもちつつも科学的な方法論に則った研究が求められるといえるのではないだろうか。

ここに掲載される本学の教職課程を中心としてまとめられた研究が、教職課程での教育の質的向上や、ひいてはわが国の学校教育の再構築に多少とも貢献することができることを期待したい。